

プレス空知 2017年2月 深井尚子

2月は、カーニバルの季節です。キリスト教国では、この時期、舞踏会や仮装行列でたいへん盛り上がります。特に、リオのカーニバル（ブラジル）、ベネツィアのカーニバル（イタリア）が有名ですね。日本では、あまり馴染みがないイベントですが、欧米では、キリストの復活を祝う少し前の断食期に入る前の重要なお祭りです。日本語では、謝肉祭と訳されますが、訳の通り、「肉」に感謝するという意味合いがあります。カーニバルは、断食前のお祭りで、断食期というのは、「肉」を食べてはいけないという時期で、その前に肉をたくさん食べ、お酒もたっぷり飲んで、つかの間、羽目をはずすことが許される時期なのです。このカーニバルは、復活祭の46日前の灰の水曜日まで続きます。今年は、2月22日（水）が、その日に当たります。灰の水曜日は、カーニバルでの悪徳、つまり暴飲暴食を深く反省し、来たる断食期のために身を清める日なのです。つまり、今は、欧米では、まさにカーニバルたけなわで、連日、舞踏会が催されています。ウィーンの舞踏会は特に有名で、オペラ座で開催される舞踏会は、貴族の子女が、社交界にデビューする、デビュタントと呼ばれる儀式も執り行われ、そのために、ダンス教室に通って、ウィンナワルツを華麗に踊れるように準備して臨みます。ウィンナワルツは、普通のワルツとは異なり、ワルツのステップを踏みながら、大きく円を描いて回るという華やかなダンスです。

そのカーニバルに、音楽家たちが注目しないわけがありません。たくさんの作曲家が、カーニバルを題材に作曲しています。その中でも、ローベルト・シューマン（1810～1856）は、カーニバルをテーマにしたピアノ曲を3曲も書いています。「パピヨン 作品2」、「謝肉祭 作品9」、「ウィーンの謝肉祭の道化 作品26」と題名もついています。シューマンは、調性も拍子もテンポも異なる、一見関連のない小品をまとめて一つの組曲のような作品を作曲し、シューマン独特の世界を作り出しました。この3つの作品には、カーニバルの楽しく明るい雰囲気の子供の小品に1つ1つ題名がつけられており、イメージが膨らみやすい楽曲です。カーニバルには、必ず道化が現れるのですが、日本ではあまり知られていない道化も多数、現れます。ピエロは有名ですが、その他にも、パンタロンとコロンビーヌ（男女の道化で常にこの組み合わせで演じる）、アルルカン（ダイヤモンド柄の衣装を着た身軽な道化）などが出現します。私が、ウィーン留学時代に「謝肉祭 作品9」を練習していた時、それらの道化を調べ、美術館にある絵画などを見に行き勉強しました。ヨーロッパの人たちは、当然知っている道化でも、日本人である私には、初めて聞く言葉でした。「パピヨン 作品2」は、曲の最後が、カーニバルの終わりを告げる情景が目に見えかぶように作曲されています。暴飲暴食をして、居眠りをしてしまった人物が、夢心地に、朝6時の教会の鐘を聞きます。同じ音が6回繰り返されますが、パピヨンのテーマが、切れ切れに現れ、その人物がまだぼんやりとしていることがわかります。しかし、はっと目を覚まし、これは寝過ごした！とばかりに最後は目を覚ますところで、曲は終わります。シューマンは、たいへん真面目な性格だったといわれていますが、音楽の中で羽目をはずしたり、酔っ払ったりしていたのではないかと想像できます。

